

---

# 竜の落とし子

森 羅万象

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の落とし子

### 【Nコード】

N5176Q

### 【作者名】

森 羅万象

### 【あらすじ】

運命…

あなたは信じますか？

魂は巡る…

あなたは信じますか？

この話を読んで、そんな事を少し考えながら妄想に浸っていただけたらと思います。

## 出会い

ふと目が覚めれば辺りは暗闇に包まれていた。  
どうやらうたた寝をしてしまっていたらしい。

「マイちゃん…まだ帰ってないのか」

グルリと周りを見回してみたが、人の気配は無かった。

人の気配は無いものの、どこからか視線を感じる。

その視線がやけに気になりもう一度、今度はゆっくり周りを見回してみた。

すると暗闇の中に光る、丸くて小さな玉が二つ…

「ああ、なんだ、ヤドっちか」

何故だか知らないがヤドっちはよく俺を見ている。

無口で何を考えているのかよくわからない不思議な奴だ。

何回か話しかけた事があるが、返事の代わりに頷いたり首を横に振ったりするだけで一度も彼の声を聞いた事が無い。

「ヤドっちもマイちゃん待ってるの？」

そう尋ねてみるとヤドっちは首を横に振った。

そして右手を上げ、クルリと向きを変えて俺に背を向けた。

相変わらずよくわからない奴だ。

背を向けたヤドっちにそれ以上声をかける事なくボーっと彼の背中を見ていると、突然眩しい光に照らされた。

「ただいまぁー！ごめんね、遅くなっちゃった。ヤス、お腹減って

ない？」

やっとマイちゃんが帰ってきた。時間はもう深夜1時だ。こんな時間まで誰と居たんだろう？  
気になる。

そうそう、自己紹介が遅れたが、俺の名前は「ヤス」。

この家には俺とヤドっち、そしてマイちゃんの3人で住んでいる。いや、正確には『マイちゃんに住ませてもらっている』と言ったほうが正しいだろう。

そう、あれは確か1年ほど前。

大学の授業だとかで海に実習に来ていたマイちゃんと俺は出会った。その時のマイちゃんはとても暗い顔をしていた。

俺と目が合った時に初めて聞いたマイちゃんの言葉は今でもハッキリと覚えている。

「あ…やすひろ康弘…」

俺の名前は『康弘』ではない。

何故いきなり『康弘』と言われたのかは後々知る事になるのだが、どうやら誰かと俺をダブらせたようだ。

俺の存在を知ってからマイちゃんは実習の最中も時々グループを抜けては一人で俺の側に駆け寄って来てくれて、何を喋るでもなく空と俺を交互に見ていた。

その瞳は辛さが宿るも優しく澄んでいて、そんなマイちゃんを見ていると不思議と温かい気持ちになれた。

やがて日が傾き、実習が終わったマイちゃんたちは帰って行った。

もう二度と会えないかもしれないと思うと、ギュツと胸が締め付けられた。

マイちゃんは俺に何か伝えたかったんじゃないだろうか…。

いや、俺がマイちゃんに伝えたい事があるような気がして、俺はその場から動けずにいた。

いつしか太陽は完全に姿を消し『今度は俺の番だ』とばかりに海を照らす月をぼんやりと眺めていると、向こうから人が近づいて来た。

「よかった、まだ居てくれたんだね。気になってさ、一度家に帰ったんだけど…戻って来ちゃった」

声をかけてきたのはマイちゃんだった。

俺は嬉しかった。

気にしてくれていた事。

そして俺に会いに戻って来てくれた事。

しかしそれにしても、どうしてこんなに俺の事を気にしてくれるんだろう。

マイちゃんは人間…

俺はタツノオトシゴなのに…。

## 彼と俺

マイちゃんは持っていたバケツに海水を汲みながら少し言いにくそうに言った。

「ねえ…。一緒に…私の家に帰ろう?」

そしてまだ返事もしていない俺をそつと両手で海水ごと掬い上げ、バケツに入れた。

返事をしたとしてもマイちゃんに通じるわけではないのだが、俺はバケツの中で「ありがとう」と呟いた。

どういう訳か俺は人間の言葉が理解できる。

しかし残念ながら人間には俺の言葉が理解できない…と言うよりも、俺の声は人間に聞こえていないようだ。

そんなこんなで会話こそ成り立っていないが、俺に不満は無かった。それどころか嬉しかった。

マイちゃんの運転する車で一緒に家に向かう途中、俺の事を『康弘』と呼んだ理由を聞かせてくれた。

「少し前に…彼氏だった人がこの世を去つてさ。原因はね、別れ話の延長の…自殺だったんだ」

そう語り始めたマイちゃんの目からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。

「些細な事でケンカになって…私、意地張って自分が悪かった事も認めずに『じゃあもう別れようよ』って言ったら、彼は『わかった』って言つて帰っちゃって。」

次の日テレビのニュースで知ったんだ。

私と別れて帰る途中に、車ごと海に飛び込んで自殺して死んじやつた事…。

彼はよく言ってた。『僕は一人じゃ生きて行けない。僕にはマイが必要だ』って。

『康弘は一人になんかならないよ。私がずっと一緒にいるから』って約束したのに私…

大好きだったのに

愛してたのに

つまらない意地を張って彼を絶望させてしまった。

孤独にしまった。

私をもっと素直になれたらこんな事に…」

いつの間にかマイちゃんは車をコンビニの駐車場に停め、ハンドルを握ったまま嗚咽混じりに泣きじゃくっていた。

そうか。

だから海で出会った時にマイちゃんは暗い顔をしていたのか。

でも何故、彼と俺がダブるんだろう？

考えたが答えはわからなかった。

そんな俺の納得しきれない顔を見て、少し落ち着いてきたマイちゃんと言った。

「彼が言ってたの。『僕はタツノオトシゴだ』って。

意味わかる？

竜の落とし子ってさ、泳ぐのが下手で…何かに掴まってないと海の流れに流されて生きて行けないんだって」

その言葉に俺は妙に納得した。

納得したというよりも正に自分そのものだった。

その『何かに掴まる』という行為が産まれた時から誰に教えてもら

うでもなく当たり前過ぎて考えもしなかったが、いつも海藻に尻尾を巻き付けているから流されずに餌も獲れる。

もし掴む『何か』が無かったら…

生きて行くのは難しいかもしれない。

亡くなった彼は『マイちゃん』という存在に掴まっていたからこそ生きていたんだろう。

人間も大変なんだな…。

「よし、帰ろう、ヤス。

あなたの名前はヤス…。いいよね？

私の名前はマイ。よろしくね」

そう言ってマイちゃんは再び車を走らせ、家へ向かった。

## 海から水槽へ

マイちゃんの家はワンルームのアパートだった。

バケツの中から部屋の様子を伺うと、少し散らかった部屋の真ん中に小さなテーブルが一つ置かれていて、その上には何やら化粧品らしき物や食べかけのお菓子、パソコンなどが置かれていた。

その横にはベッドがあり、枕元に縫ぐるみが置かれている。

よく見るとそれはタツノオトシゴをモチーフにしたキャラクターの縫ぐるみだった。

そういえばマイちゃんの携帯電話にもこの縫ぐるみと同じキャラクターのストラップが付いていた。

亡くなった彼を想う気持ちがまだ強く尾を引いているんだろう。

さらにキヨロキヨロ見回してみると、部屋の片隅に水を張った水槽が見えた。

「あの水槽ね、さっき授業が終わって一度帰った時に用意しといたんだ。

ヤスがあそこで待っていてくれる気がしてさ。

ごめんね、ちょっと狭いけど…気に入ってくれるかなあ？」

マイちゃんはそう言いながらバケツを水槽の前まで運んだ。

そしてバケツの中の海水ごと、そっと俺を水槽に放ったその時…

フワフワと漂う俺の横を、猛スピードで落下していく石コロに危うくぶつかりそうになった。

「あれ？暗くて気づかなかったけど、バケツで海水を汲んだ時に一緒に入っちゃったかな？」

2センチ程の丸い石コロだが、俺にとってはまるで隕石だ。  
あんなのが頭にぶつかれば軽いケガでは済まないだろう。

「危ないなあ、もう」

ブツクサ言いながら慌てる俺をマイちゃんは特に気にする様子もなく、水槽の前に座りジッとこっちを見ている。

そして本能のままに掴まる場所を探すべく、ぎこちない泳ぎでウロウロする俺を見て言った。

「心配いらないよ。ヤスが不安にならないように飾りサンゴや海藻、いっぱい入れといたからね」

確かに掴む場所に不自由する事は無さそうだ。

俺は早速この水槽の中から部屋が見渡せる場所に置かれている海藻に尻尾を巻き付けた。

それを見てマイちゃんがこっちを見て微笑んでいる。

彼氏が亡くなる前は…

マイちゃんに寄り添って安心した彼氏の顔を、きつとそっやって微笑んで見てたんだろう。

「康弘。ずっと…一緒にいようね」

優しい顔でマイちゃんは言った。

その瞬間、俺の体に電気のようなものが走った。

なんだろう、この気持ちは。

心に初めて生まれた感情だった。

温かくて嬉しくて…

なんだか少し切ない。

この気持ちをどうすればマイちゃんに伝えられるだろう。

「マイちゃん…」

絞るように出した声は届くはずもなく、水槽のガラス越しにただ見つめる事しかできなかった。

その夜マイちゃんはベッドではなく水槽の前に布団を敷いて寝てくれた。

初めての水槽という空間で緊張のせいかなかなか寝つけなかった俺は、ひたすらマイちゃんの寝顔を見て時間を過ごした。

これからどんな日々が始まるんだろう…。

そんな事を考えながら過ごし、やっと睡魔が襲ってきたのは外が薄らと明るくなってからだった。

これがマイちゃんとの出会いだ。

「はい、遅くなってごめんね。ヤス、ご飯だよー」

おっと、すっかり思い出に浸ってしまっていた。

マイちゃんがブラインシュリンプの入った容器とピペットを持ってこっちに来た。

これから待ちに待った餌の時間だ。

この家に来て一年、マイちゃんはイサザアミやブラインシュリンプ

など、いつも欠かす事なく美味しい餌を用意してくれている。  
こまめに水換えもしてくれるし、水槽がちよつと狭い事以外は本当に快適で満足のいく生活だ。  
おかげで最近人間で言うところの『メタボ』になってしまった。  
泳ぐ時にお腹がジャマをする。

## ヤドっち

マイちゃんがピペットでブラインシュリンプを容器から吸い上げ、俺の近くに漂うようにそれを撒いてくれた。

今日の餌も抜群に美味い。

それは同居している彼…そう、ヤドっちも同じだったようだ。

いつも餌の時間になるとどこからともなくヤドっちが出てくる。

ヤドっちはいつもボーっとしているのに、この時ばかりは俊敏だ。

「ヤドっち、俺たちももう一年近い付き合いだしさ、そろそろ心許してくれないかなあ？」

黙々と餌を頬張っているヤドっちに声をかけてみた。

するとヤドっちは俺のほうをチラリと見て自分の殻にスポットと入った。

「あ…石コロになっちゃった…」

無愛想なのかシャイなのか知らないが、ヤドっちは話しかけたり機嫌が悪かったりすると時々こうやって石コロのようになる。

そう、あの時も。

初めてマイちゃんの家に来て水槽に移された時に頭上から降ってきた石コロは、実は石コロではなくヤドっちだったのだ。

初日は石コロだと思って気にもしてなかったが、翌朝起きた時に何か違和感を感じた。

寝る前に隣にあったはずの石コロが朝起きたら無くなっていたのだ。俺が寝ている間にマイちゃんが水槽から出した様子もなかった。

不思議に思っていると、次の日石コロが飾りサンゴの隙間にあるのを見付けた。

しかもよく見るとガタガタ動いている。

恐る恐る近付いてみると、それは飾りサンゴの隙間にハマって動けなくなってもがいているヤドカリだった。

何とか救出しようとしたが、押しても引いてもピクリともしない。

「なにこれ、石コロじゃなくてヤドカリさん？ふふ…ヤス、お友達がいて良かったね」

非力ながらもヤドカリの救出に励んでいた俺を見てマイちゃんがそう言った。

そして指先でいとも簡単にヤドカリを救出すると手のひらに乗せて

「ここに来たのも何かの縁ね。じゃあ君の名前は…  
うーん…えーっと…ヤドっち」

と即座に何のひねりもない名前をつけたのだった。

ヤドっちは嬉しかったようで、マイちゃんの手のひらの上で両腕を上げ、ブンブン振り回していた。

それからというもの俺とヤドっちは、特に干渉し合う事なく寝食を共にしている。

今はまだ俺に心を開いてくれてないようだが、いつかお互いの未来を語り合えるような仲になりたいもんだ。

ヤドっちも俺と同じように思ってくれているといいのだが、なにせ一年間この調子だから、まだまだ先は長そうだ…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5176q/>

---

竜の落とし子

2011年2月19日14時30分発行